

明治の佐伯三青年 (六)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一而

(賛助会員・埼玉県川越市)

二人の苦学生活

明治四五年頃の塾生の一ヶ月の費用が、大体六両、すなわち六円ぐらいであることは前に書いた。しかし矢野は、その中から、洗濯代・履物及び傘代・雑費をひけば、父の仕送りだけで二人分なんとかなると冒険を試みた。だが、世事はそう甘くなかった。林が上京して三、四か月もたつと二人の塾生活は、きりつめてもどうにもならなくなっていた。

明治二十年に、報知紙上で、矢野は「父子別居論」を書いていいる。今でいう矢野の親離れは早く、この頃ですでに社会の中の一個人という明確な認識をもっている。塾が「封建的なきずなを脱した独立の個人が、志をともにして結んだ公共団体であって、洋学の講究を目的とし、

学問を公私に役だてようとするものである」とする独立自尊の精神に、矢野は共鳴したにちがいない。

矢野は、自分で決めたことに、依怙いこじ地なほど頑張りを見せる。父にさえも頼らず、林とともに自らの経済苦境打開策を探す。要は、学業を主体に、すべての経費を節約することである。

林は、自分のためにすまないと思いつつも、目的のために進む矢野の覇気に、それさえも口に出すのをはばかった。矢野をはそういう男である。

春の大試験がすむと、矢野は、耳寄りな話を聞いてきた。

「おい茂吉、あの散歩道の林に寺のあるのを知っているだろう。あそこに空家があるらしい。そいつを借り

て自炊生活をやるう。」

林は、突然の申し出に当惑したが、成程、寄宿舎の費用が削減されると思った。そう決めた二人は、早速空家の二階を借りることにした。最初のうちは自炊生活ももの珍らしかったが、食事を作るのは、めんどうなことであつた。もちろん空腹を満たすだけの食事であつたが、手間のかゝることと時間の浪費が惜しかった。食事の雑念に毎日追われることも苦痛の連続であつた。

金がなくなると、梅干しや漬物で三食をすますことは度々あつた。

しかし、能力次第で昇級できる塾の仕組みは、二人に、衣食住など問題にさせなかつた。新知識の習得が、苦学塾生の苦痛を一種の生活の張りに変えさせる刺激剤になるときもあつた。

夏になると食物は腐りやすい、手取り早いのは、やはり漬物である。買物掛りの林が、ある日新菜の甘い漬物を買ひこんできた。なるほど匂いのはうまかつた。朝夕三食、一日はこれでおさまつたが、二日目となるとあきてくる。しかし捨てるわけにもいかない。三日目も続いた。その日のことである。

下宿に帰つた矢野が林に言う。

「今日は参つたぞ。譯読の最中にゲップが出てしようがなかつた」

林もそうであつた。

「矢野さんもそうでしたか。私も弱りました。ゲップはゲップでも青臭いやつで」

二人は顔を見合せて笑つた。

それから、今度は干魚に改めることにした。苦学の中にも、まだまだ青年の夢があつた。しかし、こうした無茶な生活はそう続くものではない。限界と執念のならめつこであつた。

夏が終ると秋の大試験がある。

誰にも負けたくはないが、生活の不安がちらつき始めていた。その月のことである。父からの仕送りに二人分の学資が送られてきた。父光儀の任地深津県は、六月に小田県とかわつていたが、二人の苦学が親の耳に入ったらしい。母のさしがねであつた。

矢野と林がほつとしたのはいうまでもない。生活の苦痛は、やせ我慢で通せるものではない。矢野は妙な気持

ちであったが、自ら援助を申し出た訳でもないのに、有難くちようだいたした。変な理屈である。矢野の気性を一番よく知っている母親ならではの配慮であった。

この頃の義塾は、初学の生徒へは、「理学初步、或は文典を素読せしむ」とし、次で「文典会説、究理書、地理書、歴史等の講義に、尚一步を進めば、経済書、歴史等の会説に出席せしむ」としている。すなわち、数学を学問の根底とし、語学から入って、地理、物理を学び、歴史を経て、経済、修身をもって学習の過程としている。

これは、明治五年十一月に慶応義塾から東京府に提出した「私学明細表」の中の教授書籍概略である。

矢野や林は、興味を示しながらも理科系統には弱かった。しかし当時の塾生の大半がそうであったらしい。二人は片時も英書を離さず、それこそ寝食を忘れて勉強している。そして異例の進級をとげている。父からの学資が増額されると、つまらぬ意地を張るよりも、学業本位にたち返ることが筋であった。矢野は父に感謝しながら、再び寄宿舎に逆戻りするが、それからの二人は、落着いて学業に励むことができた。

この年の、後に二人の笑い話に残るほどの苦学生生活は、矢野にとっても林にとっても、一生の思い出になった。

漢学塾時代の矢野は、塾の粗食にたえかねて、よく安料理屋に転がりこんだが、この一年は、いわば親友である林のために苦労している。しかし林もこれに応えてよく頑張った。卑屈にならず、持ち前の気性を精進練磨に転化させた。この絆が、後に片や政界、片や言論界と、相擁して民権論の啓蒙に突っ走るようになるが、表裏一体の結合が、この頃から暗黙の了解のもとに、自然に培われつつあった。

林は、始めて国元から手紙を受取った。

両親の心配もさることながら、佐伯の事がこまごまと書かれてあった。佐伯県が廢されて大分県に統合されると、県の佐伯出張所ができ、もとの庁舎である天祐館（南御殿）をそのまま使用し、西名氏が所長になったこと、又、七月から一般郵便が開始され、船頭町の丸屋が業務取扱いを委任されたが、実際の業務はまだ行われていないことなど、終りに健康についてくどいほど注意が重ねられていた。林はこれらのことを矢野に話した。一通の

手紙で故郷の郷愁を感じないでもなかったが、北海道を除いて全国的に開始した郵便制度一つをみても、半年もたとうとして、未だに実施されない佐伯を考えると、東京との距離を感じずにはおれなかった。東京では、新橋・横浜間の汽車が開通し、郵便蒸気船会社が創立されたり、ガス燈の話まで聞かれる毎日である。東京と佐伯では、万事「二三年は違うわい」と思った。

こうした世事には両耳をふさいでいた二人だが、太陽暦の採用には、いくら塾生でも知らぬ顔はできなかった。十一月九日の布告によって、太陰暦を廃し、太陽暦を用う。すなわち、明治五年十二月三日をもって六年一月一日とするのである。そして、昼夜十二時を改めて二十四時間とする。

突然の改暦に、巷では、十二月三日を翌年の一月一日にすれば、二十七日間の損をすとか得をすとか珍説がとびかっていた。

数日後、林は宿舎で天井を眺めながら寝っ転がっていた。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと云へ

り。されば天より人を生ずるには、萬人は萬人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく……」

有名な「学問のすゝめ」の書き出しである。林は、この年に発行された福沢先生のこの文句が気に入って、すっかり暗誦していた。そこへ矢野がやってきた。手に一枚の新聞があった。

「東京日日新聞」とあった。

林は、眼ざとく「新暦の略暦」を見つけた。そこには、わかり易く解説されていた。

「矢野さん、これで損得論はおさまるかもしれませんなあ」

矢野は笑っていた。

「新聞とは便利なものだ。むづかしい理屈はぬきにしても、わけのわからぬ奴等には有難かろう。しかしなあ茂吉、おれは政府のやり方が気に食わん。一応の学問のある奴はよいとしても、無学な奴には、十二月三日を一月一日と思えというのと同理ではないか。」

言われてみればその通りである。しかし、太政官布告に解説をつけろというのも無理である。

「それにしても矢野さん、暦については、西洋書はど

んな解説をするでしょうか。興味があるなあ」

林は、塾の一年生らしく、西洋書に置き換えてものを見る風習に変わりつゝあった。矢野の方は、多分に政治的である。何事も理を究めないと気のすまない矢野にとつて、無知の上に誤りを犯す危懼の方が心配であった。

しかし、この事を誰よりも憂慮していたのは、二人にとって大先生の福沢諭吉であった。丁度風邪気味で臥床中の福沢は、この改革を国民に理解させるため、床の上で筆を取っていた。六時間で脱稿したという。これが直ちに出版された『改暦弁』である。太陽暦と太陰暦の弁別を説き、「俄に二十七日の差を起したれども、少しも



佐伯市三の丸にある

怪むに足らず」、「よく基本を詮索せざるべからず」とし、終りに無学を皮肉っている。

「平生より人の読むべき書物を読み、物事の道理を挙げてよく基本を尋れば、少しも不思議なる事にあらず。故に日本国中の人民、此改暦を怪む人は必ず無学文盲の馬鹿者なり。これを怪しまざる者は必ず平生学問の心掛ある知者なり。されば此度の一条は日本国中の知者と馬鹿者とを区別する吟味の問題というも可なり」

「時計の見様」まで親切な説明を加え、矢野と林は、最初に「西洋の書を調べて」とあるのを読んで、溜飲を下げたにちがいない。とくに林は、辞書の力を借りてでも、原書の訳読・理解が一日でも早く独力で出来るようにやりたいと思った。

矢野義塾の初級教師となる

太陽暦採用のおかげで、上京以来満一年を迎えた林にとって、五年を通り越して明治六年になったのは、妙な気持ちであった。一月遅れて入塾した同じ大分県臼杵出身の箕浦勝人やその他幾人かの塾友もでき、後輩の数が

増すにつれて、少しは心のゆとりも持つことができたが、この一年は全く無我夢中の一年であった。

そして春になると、教則変更に関する告示が発表された。それは、学科課程に正則変則の二種を設ける趣旨であった。学制の改革である。告示の趣意はわかつて、貧乏書生の林にとっては頭痛の程である。こんな時ほど先輩矢野の言葉に左右されることはない。

「茂吉。なにをくよくよしている。英学が一年や二年で成就するものでもあるまい。梅干や漬物をかじつても一年は過ぎた。告示の通り、変則は過渡期の産物であり、正則は、これからの学問の順序を教えている。一年二年の辛棒が将来必ず役に立つ。卒業の制度が一年永くなれば、それだけ英学が身につく。目先のことだけは止めよう。やりだしたら水を飲んででもやり遂げろさ」

矢野の言葉に、林はいつも激励される。

そして、金のことは少しも言わない矢野であった。もとより正規の過程を学びたいのは、林だけではなかったが、地方出身者にとっては、東京遊学の消費はばかにならなかった。

この年の塾の学制改革は、正則科を予備等と本等に分け、本等を四年としている。これらは、明治五年政府の学制布告以来、時代の趨勢であった。西洋文明をとり入れるのに急のあまり、必要部分のみ研究された変則時代から、ようやく学問として、系統づけられる落着きを見せている。矢野が学んだ頃が、丁度旧制度の最後の組ということになる。この改革が発表されるのが、この年の四月である。

矢野自身は、旧制のまゝ一通りの学業を終えている。当時の塾の学風は、五等になると六等以下の教師であるすなわち、半学半教の精神である。五等になると、自らの学習によって新知識を修め、そしてこれを後輩に伝授するというしくみである。だから、基礎読力を学んだ以後が、各自の力による真の勉強ということになる。自分で選んだ洋書を、独力で理解する楽しみは、この頃からである。

この頃から矢野は、図書館にあった『米國憲法史』を引っ張り出している。「早く西洋綴の本が読みたい」と洋書にあこがれた矢野が、一番先に政治書を手にするのも偶然ではない。かごから放たれた鳥のように文献を漁

る。当時の図書室は、旧島原侯の御殿をそのまゝ用いた二十畳ほどの月波楼の一部であった。文庫といつても政治書は少なく、理学・理財学の類に人気が集まっていた。矢野は、たった一冊しかなかった五百頁ほどの『米國憲法史』を手にした。そしてこの研究に没頭することになった。

一年入塾の遅れた林が、先輩に追いつけ追い越せとばかり、競争心を燃やしたのはいうまでもない。

こうして間もなく、矢野は学業を認められて初級の担任教師に抜擢された。矢野にとって、これほどの名誉はなかった。当時の塾生の目標といえば、第一に教師、第二に実業、末席が官人になることであつた。母校の教師に採用されることは、現在のエリートコースであつた。「例の憲法史を全巻通読したのは、塾でも矢野を以て（矢野）矢とする」といわれた矢野の充実振りが実りつゝあつた。それよりも、教師としての自由時間と幾らかの収入が出来たことが、なによりも嬉しかった。これは、林にとつても喜ぶべきことであつた。

これを契機に、矢野は許嫁の劣子と十月に結婚した。矢野は二十四才になつてゐた。

この明治六年十月は、西郷隆盛の征韓論が破れた決定的な月でもある。世相は、今にも西郷が起つのではないかと騒々しかった。三条実美に遣韓使の内諾を得ていた西郷は、岩倉欧米使節団の帰国後も延ばしに延ばされて、遂に決裂したのである。西郷の下野とともに、参議後藤象二郎・江藤新平・板垣退助・副島種臣の各参議も辞表を提出した。西郷が鹿児島に帰ると、西郷とともに上京していた近衛将校も、足並みを揃えて帰国し、動搖の色はかくせなかつた。塾内でも次第に波及し、旧島津藩の塾生は、西郷を追って帰国するものも多かつた。

西郷は沈黙のまゝ野に下つたが、他の参議は、その善後策について協議した。一旦決定した閣議を、宮中に勢力をもつ少数者によって覆がえされるのは、原因はその政体であり、政体の変革こそ急務であると思ふようになった。しかし、四参議に腹案があつたわけではなかつた。当時、英国から帰国していた、古沢滋や小室信夫の意見から英国政体のあり方を聞き、これが民選議院設立の建白書と発展してゆく。万機を公論に決す模索が始められたのである。

政治に不偏不党の教育方針をとっていた塾内まで波及したこの征韓論騒動に、矢野や林もそれなりの意見をもっていた。しかし、維新で薩長に遅れをとった土肥のよくなあせりはなく、かといって、維新を迎えた新時代の恩恵に浴すればこそ、薩長をうらむ筋合いは少しもなかった。征韓にしろ内政にしろ、だから日本をどうするんだという国のあり方の方にむしろ興味があった。それが又、矢野の持論でもあった。新国家建設の志士でありたい自負があった。福沢先生からは、ギゾーの文明史の講義を聞いたことがある。西洋文明のよって来るところはなにか、民族の歴史から現在にある政治・制度・経済・法律の研究の方が先だと考えた。林からは孟子から出た東洋的民約論の話もあったが、東洋的にしろ西洋的にしろ、その知識は幼稚であった。

矢野は、まだ一冊の『米國憲法史』を読んだに過ぎない。林にいたっては、正則科の三年生として、ウェーランドの修身論やダナのジオロジーを習学中である。矢野や林の理論からいえば、学業に精出すことこそ第一の急務であった。

それからの矢野は、片っぱしから原書を手にするが、

世間の雑事に耳をふさぐには、故老の物語から得たヒントがあった。

「予が教師たりし時、一日故老の物語を聞きしに、昔而替屋にて金銀の眞贋がんを鑑定せしむるその小僧を仕込むには、其始め純金純銀のみを取扱はしめ、其眼に熟するに至るまでは決して他の混合せる品物を其眼に触れしめず、斯くして純金純銀の眼を触るること歳久しきに及び、不正の物を取扱はしむれば、立ちどころに眞贋を鑑別するを得るものなり。是れ而替屋が小僧を仕込むの法なりと聞きしより深く其理あるを思ひ、学生たりしより教員となり前記せる如く四年間自ら必要なりと考ふる政治、制度、経済、法律の読書を調ぶる間は、努めて耳を世間の議論に閉ぢ、新聞と雖も雑報の外は論説などを読むを避け、先づ欧米の事物の真相及び制度仕組を髣髴ながらも胸中に認め、然る後眼を転じて日本の事物を見れば、其當まさに改むべき事當まさに為すべき事は自ら明瞭ならんと考へ、一意好む所の書籍のみ閲覧し居たり」

とは、後年矢野が語る「在塾当時の懐旧談」である。

また、矢野が教師になりたての頃、塾内で「演説」が

はやりだしている。「演説」という言葉は、塾中の小泉信吉がもってきた、原書の中のスピーチの訳語であるが、この小冊子を『会議辯』として翻訳した福沢の苦心談の中で、最初「演舌」としたが、「舌」はあまり俗すぎるので「説」としたとある。啓蒙家としての福沢は筆で人を導くとともに、口で人に教えることも一方法であると考えた。そして、『会議辯』の實際を自邸の西洋館や両国橋下の屋根舟で試みている。

あるとき、塾の食堂で、福沢先生のとをうけて矢野が演説したことがある。それについて矢野は林と話合った。

「いやあ茂吉、今日はいったぞ。福沢先生が急にやれと言われたが、何をしゃべったかさっぱり分らん。全くの冷汗もんじゃ。筆で書くようなわけにはいかぬ」これが矢野の実感であった。

「いつもの矢野さんらしくなかった。第一筋が通っていないし、話がぎくしゃくしている。理路整然として話すいつもの矢野さんの話し方ではなかった。それが印象的だった」

「いや。そこなんだ。何を話すかゞ先決問題だが、そ

れよりもうまく話そうとすると、かえってあせって駄目なんだ。書くこととしゃべることは又別問題だと思った」

林もそれを感じていた。

「同感だな。漢文くずしの名文章と、ふつう話す言葉とをつなぎ合わせるんだからなあ。むづかしいかもしれぬ。翻訳のようにはいきませんか」

当時、『西洋偉人言行録』を訳していた矢野は、軽く林に皮肉られた。

「だがな、いい勉強になった。結論をもってゆくまでに、話の組み立てを考えねばならんことが分った。そして、それをいかに納得させるかだ」

矢野は生真面目にこう話した。そして、ため息をつくようにしてつぶやいた。

「講師はうまいもんだ」

林は、講師と聞いて笑いだした。矢野もつられて笑ったが、このときの処女演説は忘れられなかったらしい。のちに、矢野は徳島分校の校長として教職にあるとき、「演説文章組立法」なるものを生徒に示して、演説の研究につとめている。

(つづく)